

研究機関名：旭川医科大学

作成年月日：2024年2月1日（第1版）

承認番号	23165
課題名	骨シンチグラフィにおける関節炎に対する骨集積の定量化とその有用性に関する検討
研究期間	実施許可日 2024年 2月 29日 ～ 2027年 3月 31日
研究の対象	1) 2008年1月～2024年1月に当院で骨シンチグラフィを受けられ、異常なしと言われた方 2) 2008年1月～2024年1月に当院で関節炎と診断された後に骨シンチグラフィを受けられた方
利用する試料・情報の種類	<input checked="" type="checkbox"/> 診療情報（詳細：骨シンチグラフィ画像、年齢、性別、診断名、画像情報及び測定値、血液検査結果、治療内容、既往歴 等） <input type="checkbox"/> 手術、検査等で採取した組織（対象臓器等名： ） <input type="checkbox"/> 血液 <input type="checkbox"/> その他（ ）
利用予定日	開始日 2024年 3月 1日
試料・情報の管理について責任を有する者	旭川医科大学 学長 西川 祐司
研究の意義、目的	骨シンチグラフィという検査は、多くは骨転移があるかどうかを調べる検査として行われますが、関節リウマチ等の関節の痛みに対しても行われることがあります。骨転移や関節炎等の病変があると強く光り、全身の骨の中で、病変がどこにあるかがわかります。骨転移を調べる検査では、骨転移の程度を見るためにその光の量を測定し、測定値の程度や変化から、治療の効果を評価することに用いられています。この測定値を算出するために人工知能を用いた診断支援システムもすでに活用されていて、解析をさせると自動的に測定値が得られます。しかし、関節炎の集積に対して、病変の光の量を測定し、治療に活用している報告は少ないのが現状です。そこで、本研究では、人工知能を用いた診断支援システムを関節炎の光の測定に利用して、測定値を算出し、どの程度の光の量であれば、関節炎があると言えるかを検討することで、関節炎の治療に活用できる基準値を導き出すことを目的としました。
研究の方法	骨シンチグラフィの画像から、関節近傍の光を測定し、関節炎が認められた人の光の測定値と、関節炎はないが変性変化(変形性関節症)が見られた人の光の値に違いがあるかを検討します。また、具体的にはどれくらいの光の量があれば、関節炎が存在するのか基準値が設定できるかどうかについても統計学的に検討を行います。
その他	人工知能診断支援システムは、すでに当院で主に骨転移の検出に使用されているものを使用し、関節炎の評価に対しても、利用できるのかどうかを検討します。

お問い合わせ先	<p>本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することができますのでお申出下さい。</p> <p>また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としないので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。</p> <p>照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：</p> <p>研究責任者 旭川医科大学 放射線医学講座 野村 健太 電話番号：0166 - 68 - 2572 E-mail: kenta-rpg7vsd@asahikawa-med. ac. jp</p>
---------	--